

8. 慢性疾患をもつ児童・生徒の発達に影響する要因

— 養護教諭からみた問題点 —

高知中央高等学校	○ 宮 上 多加子 (26回生)
高知中央高等学校	竹 内 美佳子 (26回生)
東又小学校	浜 田 敬 子 (26回生)
高知学芸中学校	梅 原 良 子 (27回生)
県立安芸病院	廣 末 ゆ か (29回生)
高知女子大学	山 崎 美恵子 (5回生)

はじめに

Mussen P.H.は発達に影響する要因として、1. 遺伝的に決定された生物学的要因 2. 病気虚弱などの非遺伝的な生物学的要因 3. 子供の過去における学習 4. 直接の社会的心理的影響 5. その中で子供が育つ総合的な社会的、文化的な環境をあげて、病気・虚弱があること自体が小児の発達を阻害するものであると同時に、虚弱であるために、年齢段階にあった発達課題を達成するための学習にたいして、子供のもつ能力を十分に発揮出来ない状況におかれるといている。¹⁾

特に学校という環境は学習によって多くの発達課題を達成していく場である。最近、臨床においては、治療技術の発達や入院による子供への影響をできるだけ少なくするために、入院期間を短くし、家庭で日常生活をおくりながら治療を継続する傾向にある。慢性疾患をもつ子供は特に、このような環境下で日常生活をおくっているため、多くの問題をもっていると考えられる。そして、その問題は、青年期、成人期の発達にむけて、大きな支障となることが予測される。

このような状況にある慢性疾患をもつ子供に対して看護者や医療従事者、教師、その他の人々は、どのように関わればよいのかを考えていくことが大切である。

今回の調査は、慢性疾患をもつ児童生徒が発達課題の達成に関して、どのような問題をもっているのかを明確にしていくことを研究目的とする、その第一報として養護教諭の立場からみた発達課題の達成に関する問題点を発達に影響する要因の一つである学習の視点から分析したものである。

研究方法

・ 調査対象

高知県下の小・中・高等学校に勤務する養護教諭（養護学校は除く）437名で、回収率は

小学162名59.8%、中学56名49.1%、高校32名61.5%、計250名57.2%であった。

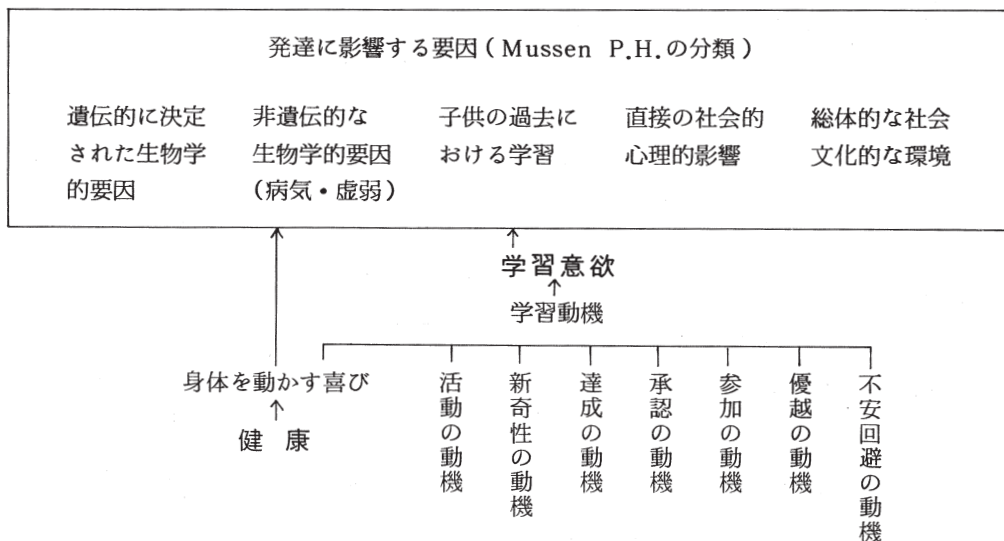
・ 調査期間

昭和62年12月

・ 調査方法

1. 能力や学力は学習によってなされ、子供の人格の決定要因の一つであるというMussenの理論と、学力は「やる意欲」があってはじめて身につくものであり、その学習意欲を高める学習動機として杉村²⁾による 1活動の動機 2新奇性の動機 3達成の動機 4承認の動機 5参加の動機 6優越の動機 7不安回避の動機を参考にした。(図1)

図1



2. 慢性疾患をもつ児童生徒についてクラスメートと相対評価し、全体的なとらえ方として養護教諭が把握している現在の状態を質問紙・一部自由記載によるアンケート調査を行い、結果を分析・考察したものである。

結果と考察

小学養護教諭162名から131事例、中学養護教諭56名から61事例、高校養護教諭32名から38事例、計230事例の慢性疾患をもつ児童生徒について分析する。

1. 養護教諭が慢性疾患をもつ児童生徒の状態について把握している内容は、学習動機を阻害するさまざまな具体的要因をもつ者と、それらの要因が相乗作用した結果、「学習意欲が低い」という上位のレベルで観察されている者がいた。

「学習意欲が低い」という状態で観察されている者は小学52名(39.7%)、中学20名(32.8%)、高校9名(23.7%)、計81名(35.2%)であった。

2. 子供は、自分の身体を動かし、その子供の年齢の成熟にあった行動ができることに大きな喜びを感じるものである。調査では、「運動能力が低い者」103名(44.8%)、「身体的発達に遅れがある者」47名(20.4%)、「持久力・注意力に欠ける者」88名(38.3%)あった。このような身体的状態があるときには、身体的な活動をしたという気持ちにはなりにくく、そのために十分な能力が発揮されないため、この喜びを経験することが少ないと考えられる。これは、活動の動機を阻害する状態にあるといえる。(図2)

図2

主として身体的な活動をしたという 活動の動機			
	運動能力が低い	身体的発達に遅れ がある	持久力・注意力に 欠ける
小学校	70 (53.4)	32 (24.4)	64 (48.9)
中学校	24 (39.3)	12 (19.7)	18 (29.5)
高等学校	9 (23.7)	3 (7.9)	6 (15.8)
計	103 (44.8)	47 (20.4)	88 (38.3)

3. 「自発性・自立性に欠ける者」78名(33.9%)、「依存心が強くなった者」55名(23.9%)、「おとなしくなった者」25名(10.9%)、「内気になった者」21名(9.1%)いた。このような状態のときには、新しいことや変わったことをしたいという新奇性の動機を阻害する。「将来の志向性に欠ける者」42名(18.3%)は達成の動機を、「わがままになった者」54名(23.5%)、「社会性が遅れている者」61名(26.5%)は参加の動機を阻害する。(図3)

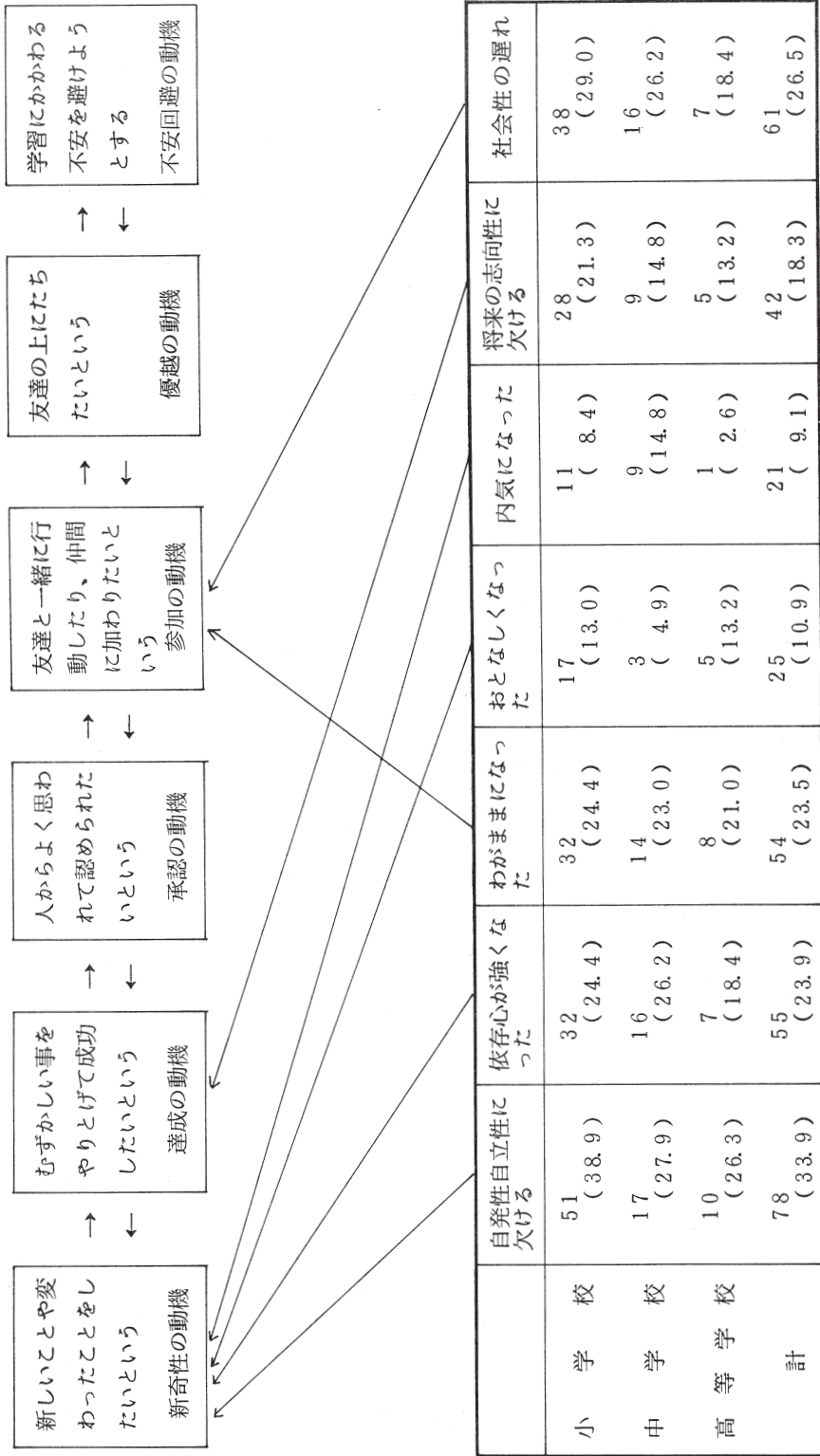
それぞれの動機はお互いに相乗作用をしながら学習意欲を高めるものであるが、慢性疾患児の現状は直接的に学習動機を阻害する要因になりながら、なおかつ結果として、学習意欲を高めるための全ての学習動機を阻害することになり、学習意欲が高まらない状態にあるといえる。

4. 学習動機を阻害する要因で高率のものから順にあげてみると、

小学「運動能力が低い」53.4%、「持久力・注意力に欠ける」48.9%、「自発性・自立性に欠ける」38.9%、「情緒の統制力に欠ける」32.1%

中学「運動能力が低い」39.3%、「持久力・注意力に欠ける」29.5%、「情緒の統制力

図 3



に欠ける」29.5%、「社会性の遅れ」26.2%、「依存心が強くなった」26.2%
 高校「自発性・自立性に欠ける」26.3%、「運動能力が低い」23.7%、「情緒の統制力
 に欠ける」23.7%、「わがままになった」21.1%の順であった。小・中・高ともに
 活動の動機、新奇性の動機を阻害する要因が高率であった。（表1）

5. 学習動機を阻害するそれぞれの要因について小・中・高別にみると中学・高校よりも小
 学において各項目にあてはまる児童の割合が高く、年齢が低いほど一人の子供が多くの発達課
 題上の問題をもつ傾向にあることがわかった。学習動機を阻害するさまざまな要因について高
 率であった上位のものについてみると、「運動能力が低い」小学53.4%>中学39.3%>高
 校23.7%、「持久力・注意力に欠ける」小学48.9%>中学29.5%>高校15.8%、「自発
 性・自立性に欠ける」小学38.9%>中学27.9%>高校26.3%であった。

表1 慢性疾患を持つ児童・生徒の状況

複数回答・（ ）内%

	小学校	中学校	高等学校	計
事例数	131 (100.0)	61 (100.0)	38 (100.0)	230 (100.0)
運動能力が低い	70 (53.4)	24 (39.3)	9 (23.7)	103 (44.8)
持久力・注意力に欠ける	64 (48.9)	18 (29.5)	6 (15.8)	88 (38.3)
身体的発達の遅れ	32 (24.4)	12 (19.7)	3 (7.9)	47 (20.4)
将来の志向性に欠ける	28 (21.3)	9 (14.8)	5 (13.2)	42 (18.3)
社会性の遅れ	38 (29.0)	16 (26.2)	7 (18.4)	61 (26.5)
学習意欲が低い	52 (39.7)	20 (32.8)	9 (23.7)	81 (35.2)
自発性・自立性に欠ける	51 (38.9)	17 (27.9)	10 (26.3)	78 (33.9)
情緒の統制力に欠ける	42 (32.1)	18 (29.5)	9 (23.7)	69 (30.0)
性格・依存心が強く なった	32 (24.4)	16 (26.2)	7 (18.4)	55 (23.9)
わがままになった	32 (24.4)	14 (23.0)	8 (21.1)	54 (23.5)
活発になった	17 (13.0)	3 (4.9)	5 (13.2)	25 (10.9)
おとなしくなった	17 (13.0)	3 (4.9)	5 (13.2)	25 (10.9)
内気になった	11 (8.4)	9 (14.8)	1 (2.6)	21 (9.1)
反抗的になった	11 (8.4)	6 (9.8)	1 (2.6)	18 (7.8)
その他	21 (16.0)	2 (3.3)	6 (15.8)	29 (12.6)

結 論

1. 身体的な発達に遅れがあり、持久力や注意力に欠け、運動能力が低いという調査結果を得た。

Roy によると、身体的自己、つまり「私の体は私にとってどのように感じられ、見えるか」という感覚と感情は、人格的自己とともに自己概念の構成要素の重要なものであり、これらは小児期に発達していく。³⁾しかし、学童期や青年期の重要他者である同年齢の友人と比較して、身体的な発達に遅れがあり、持久力や注意力に欠け、運動能力が低いということは活動への動機づけが弱く、さまざまな課題や技術を学習し達成することができないという感覚、すなわち劣等感をもつことになり、積極的に健全な自己概念の発達を阻害することになる。

2. 「自発性・自立性に欠ける」また、「依存心が強くなった」「わがままになった」「活発になった」「おとなしくなった」「内気になった」「反抗的になった」と性格の変化をあげた養護教諭が多かった。

Ellison は、依存から独立へと発達していくための基本的推進力は攻撃性にあると考えていて、⁴⁾小児期の重要な発達課題は、この攻撃的動因を抑え、それを社会に容認される限度内でどのように表現するかを習得することであり、攻撃的動因の制御不足は、怒り、敵意、欲求不満等の否定的行動として表現される。

調査結果では、「わがままになった者」54名(23.7%)、「反抗的になった者」18名(7.8%)、であった。また、過剰制御とは、消極的、不活発などであり、調査結果では「依存心が強くなった者」55名(23.9%)、「おとなしくなった者」25名(10.9%)、「内気になった者」21名(9.1%)であった。また、「情緒の統制力に欠ける者」が30名前後いた。

このような調査結果から考えられることは、慢性疾患をもつ児童生徒は年齢にみあった依存と独立の均衡を破るような状況にあり、仲間集団への参加の動機づけが弱く、社会性の遅れが予測される。すでに「社会性が遅れている者」として養護教諭が観察している児童生徒は小学38名(29.0%)、中学16名(26.2%)、高校7名(18.4%)、計81名(26.5%)いた。

小児期においては、自己概念の発達とともに、他者と関わっていく技術と能力を得て他者と共に生きること、すなわち相互依存を学習する時期である。⁵⁾相互依存を学習するためには、依存と独立がバランスをとりながら発達していく中で、友達と一緒に行動したり、仲間に加わりたいという参加の動機が高まらなければならないが、慢性疾患をもつ児童・生徒には、それらの動機を阻害するような要因をもつ者が多かった。

ま と め

Mussen や Hebb は「病気や虚弱など非遺伝的な生物学的要因と子供の過去における学習を無視して発達が成り立つものではない」また、「小児期に文化に適応できる能力を育成することが子供の人格発達の課題であり、学習に意欲的に取り組む姿勢が、自分の一生を意欲的に生きることの基礎をつくる。」といている。

今回、学校の養護教諭の立場からみた慢性疾患をもつ児童生徒の状況を調査したため、児童生徒をとりまく環境のなかの一側面からの分析ではあるが、慢性疾患をもつ児童生徒は学習意欲を阻害する要因を多くもっているという結果を得た。また、今回は発表しなかったが、以前、慢性疾患をもつ母親に対して同じ調査⁶⁾を行ったところ、学習動機を阻害する要因として同じような結果を得ている。

この第一報を基礎データとして、慢性疾患の病名別、年齢別、入院期間別等と、調査を深めていかなければならないと考えている。しかし、大卒のところでもとらえた今回の調査からでも、慢性疾患をもつ児童生徒が日常生活の多くの時間を過ごす学校という場における健康管理は、慢性疾患児の健全な成長・発達において非常に重要であり、その健康管理を効果的に実施するためには、慢性疾患児をとりまくすべての人々による連携がなされなくてはならない。今後、検討を加え、慢性疾患をもつ小児にたいする包括的な健康管理の方法を模索していきたいと思う。

引用・参考文献

- 1) P, H Mussen 他 三宅和夫監修：発達心理学概論Ⅰ・Ⅱ、誠信書房
- 2) 杉村健：発達と学習意欲の形成、児童心理、37(4), P 15, 1983
- 3) Beverly J. Rambo 松木光子監訳：適応看護論、医学書院サウンダース - P 334, 1988
- 4) 同、 P 385
- 5) 同、 P 342
- 6) 山崎美恵子他：日本看護協会集録(小児看護)、P 205, 1986, 日本看護協会